

芦屋室内合奏団
第 42 回定期演奏会

The 42nd Regular Concert, Ashiya Chamber Orchestra



兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール

Recital Hall, Hyogo Performing Arts Center

平成21年1月18日(日)

Sunday, 18 January, 2009

開場 午後1時30分 開演 午後2時

Opening at 1:30 p.m. Beginning at 2 p.m.

昭和 40 年、芦屋浜町の橋本邸で発足した当団も本日で 42 回目の定期演奏会を迎えました。

ここ数年、当団のために新しく作曲された現代曲の世界初演にも積極的に取り組んでまいりましたが、今回は新進気鋭のヴァイオリニストを迎えて、バッハのヴァイオリン協奏曲などバロックの弦楽合奏の名曲に立ち返るとともに、ロマン派の著名な弦楽四重奏曲の弦楽合奏版にもチャレンジします。

永年にわたり、相変わらず当団を暖かく見守ってくださいますご来場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

2009 年 1 月 芦屋室内合奏団 団長 青柳 良
団員 一同

プログラム

G. F. ヘンデル作曲 合奏協奏曲 イ長調 作品 6-11

第 1 楽章 Andante larghetto, e staccato

第 2 楽章 Allegro

第 3 楽章 Largo e staccato

第 4 楽章 Andante

第 5 楽章 Allegro

第 1 ヴァイオリン独奏 鳥丸安雄

第 2 ヴァイオリン独奏 福永千江子

チェロ独奏 鳥丸直子

J. S. バッハ作曲 ヴァイオリン協奏曲 第 2 番 木長調

第 1 楽章 Allegro

第 2 楽章 Adagio

第 3 楽章 Allegro assai

ヴァイオリン独奏 鈴木 花恵



♪ 休 憩 ♪

F. シューベルト作曲 G. マーラー編曲 弦楽合奏曲 ニ短調 「死と乙女」

第 1 楽章 Allegro

第 2 楽章 Andante con moto

第 3 楽章 Scherzo Allegro molto

第 4 楽章 Presto

指揮 酒井 睦雄

演奏 芦屋室内合奏団

■ バロック時代の協奏曲

17世紀後半から18世紀前半にかけての後期バロック時代は、ヴァイオリンを代表とする弦楽器が発達した時代であるが、この時代の特徴を最も端的に現す器楽曲が合奏協奏曲である。主にイタリアで発達した合奏協奏曲はソロの旋律楽器と、合奏楽器に通奏低音が合わさったトゥッティとが掛け合って協奏する形式である。この形式はアルカンジェロ・コレリ(1653-1713)が発展させてドイツに受け継がれた。

一方イタリアバロック時代のもう一人の巨匠アントニオ・ヴィヴァルディ(1678-1741)は急・緩・急の3楽章形式からなる有名な「四季」を含む協奏曲集「和声と創意への試み」など、ヴァイオリン独奏用協奏曲を数多く作曲した。この形式は、その後バッハに深い影響を与え、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派、メンデルスゾーン、チャイコフスキーなどのロマン派以降の協奏曲に引き継がれていく。

■ G. F. ヘンデル作曲 合奏協奏曲 イ長調 作品6-11

J. S. バッハと同じ年にドイツに生まれ、その後イギリスに渡ったゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)はコレリの影響を強く受け、6曲からなる作品3と12曲からなる作品6の2つの合奏協奏曲集を残した。このうち本日の曲目である作品6の第11曲は5楽章からなる。第1楽章は軽快なリズムで始まり、第2楽章のアレグロ、短い緩楽章の第3楽章を経て、第4楽章アンダンテでソロは朗々とメロディを奏でる。第5楽章のアレグロではソロとトゥッティが交互に同じフレーズを演奏して曲は終わる。

■ J. S. バッハ作曲 ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ長調

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)のヴァイオリン協奏曲のうち現存するものは、イ短調の第1番、ホ長調の第2番及びニ短調の「2つのヴァイオリンのための協奏曲」の3曲である。本日演奏する第2番ホ長調は、コレリやヘンデルの合奏協奏曲と違って、独奏楽器の個性が明確になっており、イタリアで作曲された協奏曲のなかでもヴィヴァルディの影響が強い。

第1楽章は、中間部で主題の変奏、移調を行っており、後のソナタ形式における展開部の様相が見られる。第2楽章は、低音の落ち着いた第1主題ののち独奏ヴァイオリンが美しい旋律を奏でる。最後には独奏ヴァイオリンは鳴りをひそめ、余韻を残すように低音主題で静かに終わる。第3楽章は合奏が軽快なトゥッティの主題を繰り返す間に独奏ヴァイオリンが名人芸を披露するように華やかに演奏する。

■ F. シューベルト作曲 G. マーラー編曲 弦楽合奏曲 ニ短調 「死と乙女」

フランツ・シューベルト(1797-1828)は、15曲の弦楽四重奏曲を残しているが、そのうちこの弦楽合奏曲の原曲である第14番のニ短調がもっとも有名である。表題「死と乙女」は、第2楽章の主題にシューベルトの歌曲「死と乙女」が使われていることに由来する。この表題名とあいまって、一部分長調に転調するところがあるもののそれはむしろ短調部分の暗さを強調する役割を果たしており、ニ短調で始まってニ短調で終わる調性が、曲全体に暗い印象を投げかけている。シューベルト晩年の1826年の作品で、死を意識して悲観的になった作曲者の心境が如実に現れている。

第1楽章は付点2分音符と3連符の強烈で緊張感のある第1主題で始まる。第2主題は付点音符を多用したリズムで、一部複付点音符を取り入れて力強さを強調している。展開部、再現部を経て、コーダで終わる。第2楽章はベートーヴェンの第7交響曲の第2楽章を思わせる葬送行進曲風のテーマから始まり、全体はコーダを含めた6つの変奏曲からなる。第3楽章はスケルツォで、主部の軽快な主題に比べて、トリオはニ長調で描かれており、一転して穏やかな表情を見せる。曲は再び主部に戻って終わる。第4楽章はロンド形式であり、四分音符と八分音符とからなるリズムの主題と第1楽章の第1主題を思い出させる副主題が交互に何回か繰り返した後、プレスティシモのコーダで激しく切迫感に満ちた演奏で曲は終わる。

弦楽合奏版はグスタフ・マーラー(1860-1911)が室内楽をコンサート会場用に編曲したもので、コントラバスのパートを追加し、更に各弦パートに重音を追加して和音に奥行きを与えるとともに強弱記号にメリハリをつけている。本日は、普段耳にする弦楽四重奏版との響きの違いを聴き比べていただきたい。

(K.O.)

■酒井睦雄 Mutsuo Sakai 指揮

桐朋学園高等学校音楽科を経て1971年桐朋学園大学卒業。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に師事。1971年より相愛オーケストラ指揮者、1977年ザルツブルクにてO. スイトナー氏に師事。同年、東京にてS. チェリビダッケ氏のゼミナールに参加。2001年には芦屋室内合奏団を率いてドイツのバンベルクにてバンベルク交響楽団団員とともにニューイヤーコンサート、ドレスデンにてフラウエン教会落成記念コンサート等を行い好評を博す。2005年 第19回京都芸術祭音楽部門 京都府知事賞受賞。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、1974年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、1990年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

■鈴木花恵 Hanae Suzuki ヴァイオリン

東京芸術大学付属音楽高校を経て、東京芸術大学音楽学部器楽科卒業。4歳よりヴァイオリン、ピアノを始め、6歳より桐朋学園「子供のための音楽教室」新潟分室にて音楽理論を学ぶ。全日本学生音楽コンクール東京大会、小学校及び高校の部入選。新潟県音楽コンクール最優秀賞受賞。第7回「長江杯」国際音楽コンクール弦楽器一般の部第1位受賞。これまでに、京都フランスアカデミー、霧島国際音楽祭、アルゲリッチ音楽祭、ティーチノ音楽祭(スイス)等、数々の講習会に参加し、多数の演奏会にも出演。2004年ドイツでの講習会期間中には、地元のローオーケストラと協演する他、2005年7月には京都フランスアカデミーよりスカラシップを得て、サント音楽祭(フランス)に派遣される。

大学卒業後、2003年4月から1年間東京芸術大学管弦楽研究部に勤めた後、関西に活動の場を移し森悠子氏の下で修練を積んでいる。これまでにヴァイオリンを故久保田良作、澤和樹、高橋孝子、W. マルシュナー、森悠子の各氏に師事。現在、長岡京室内アンサンブルメンバーとして研鑽を積みほか、フリーの奏者としてソロ、室内楽、オーケストラで活躍している。

■芦屋室内合奏団

音楽監督	:	酒井睦雄					
団長	:	青柳良					
マネジャー	:	伊藤恵子					
会計	:	藤本恭子					
ヴァイオリン	:	青柳良	伊藤耕平	井上昌子	勝部操	喜多智佐子	
		田島光子	戸倉啓子	◎鳥丸安雄	◎福永千江子	藤本恭子	
		三村誠子	吉岡道子				
ヴィオラ	:	◎伊藤恵子	◎大内隆一	音村圭一郎	西條久美子		
チェロ	:	◎鳥丸直子	堀田一之	宮崎晴夫			
コントラバス	:	大川宏明(客演)					
チェンバロ	:	小津久子					

◎はコンサートマスター ○はパートリーダー

当合奏団は1965年、当時の神戸大学、甲南大学の学生オケの首席奏者と初代指揮者 中島良能(現湘南エールアンサンブル音楽監督、ルーマニア国立ボトシャニフィル首席客演指揮者)等が芦屋市の故橋本宗夫氏宅に集まり、スタートした。1974年からは現相愛大学 酒井睦雄教授の指導を受け、2001年にはドイツ公演でバンベルク交響楽団員とニューイヤーコンサートを行った。これまでに宮本政雄、毛利伯朗、延原武春、斎藤達男、鈴木雅明各氏にご共演いただく。40年に亘る演奏活動で取り上げた作品は、バッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディをはじめとするバロック音楽、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンからロマン派、現代音楽まで多数にのぼる。鍵盤楽器、弦楽器、管楽器奏者、また声楽の方々との共演も積極的に行ってきた。

毎月2回の日曜日、練習場に各々愛器を携えて集い、練習時間は真剣そのもの、休憩時間はお茶とお菓子里に話が弾む。毎年秋には合宿。音楽をとことん楽しむ団員ぞろいの合奏団である。